

イラク派遣の回顧と展望

前空自航空支援集団司令官 織田邦男

ただ今ご紹介いただきました、織田でございます。

3月24日に、35年間過ごした航空自衛隊を無事卒業させていただきましたが、皆様がたからご指導、ご支援いただきました本当にありがとうございました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今日はこの機会を作っていただきまして、ありがとうございます。私は3月24日の離任のときに、隊員達に「武士（ものぶ）は足跡を消し去りながら、静かに去っていく。だから過去はもう語らない」と言ったのですが、イラクだけは、これは語り続けなければいけない責務があるとも思っております。

航空自衛隊は5年間にわたりクウェート・イラクでの活動をしたのですが、その内幕を最も知っている、というか最も長く携わったのは私であります。イラク派遣活動は準備まで含めると合計6年間に及びます。空幕の防衛部長も入れて、そのうちの5年間を私はかかわっていました。

今後、国際貢献活動は益々増えていくことでしょう。その時、後輩たちが失敗しないように、そして日本国際社会のために汗を流し、国際的な地位を高めるために何をやっていいのか。私は特に派遣準備に携わった実務者として、また、2年8カ月にわたる指揮官としての目線からお話しさせていただいて、今後の自衛隊の国際貢献活動に対し、皆さんに何かとご理解ご支援を賜りたいと思います。

一 はじめに

2003年の12月26日に先遣隊が出発しまして、今年の2月14日に撤収業務隊が帰ってきました。その間2010ソーティー飛んでいます。我々はソーティー数という数え方をするのですが、離陸して着陸したらそれを1回のソーティー数ということですよ。

2010ソーティー、857日、ミッションを実施しましたが、その間延3600人の隊員が従事したわけですよ。飛行距離にしますと約70万キロ、70万キロといいますが地球を17周くらいですよ。月への往復とほぼ等しい距離、これを実施しまして運んだ人員が4万6000人、運んだ物資が670トンにのびります。

この間、全くの無事故です。しかも、一件の不祥事もなく高い規律を維持し、私が言うのは手前味噌で気が引けるんですが、隊員たちは非常に素晴らしい、日本人は素晴らしいDNAを持っているなど、指揮官自体が思いました。

私も5回現地に行きましたが、ある時、多国籍軍の将軍たちと話をしておりますと、ビックリされたことがあります。

「我々日本の自衛隊にはコートマーシャル(軍法会議)はない。マーシャルロー(軍法)というのはないんだ」と言ったらビックリされましたね。」では何故、軍法会議がなく、軍法がなく、それだけ士気高く、規律正しくできるんだ」と逆に質問されて困ったことがあります。その時はとっさに「シスイズ・サムライ・スピリッツ」とか言って誤魔化して帰ってきたのですが・・・。

それぐらい、非常によくやってくれました。そういう航空自衛官を私は非常に誇りに思います。撤収業務隊の素晴らしい活動も時間がありましたら、お話をしたいと思います。

ところで陸上自衛隊は2年半サマーワで活躍したわけですが、私は指揮官として陸上自衛隊がうらやましいと思っていました。陸上自衛隊は5人のリリーフ投手がいて、北方、東北方、東方、中方、西方と、一巡したら終わってしまったわけです。

2

航空自衛隊の場合はC-130が13機定数の飛行隊が小牧に一個ありまして、このC-130の部隊1個で5年間担当いたしました。去年の今ごろは本当に大変でした。

というのは、もう5回参加している隊員が出てきて、いつまで続くか分からない。出口のないトンネルを「さあ、走れ、走れ」と言われているようなものです。リリーフ投手というものがいない。先発完投を求められて、しかも完全試合を求められている。ヒット一本打たれてもだめだということで、ほんとに緊張した5年間だったわけですが、みんながよく頑張ってくれて、多国籍軍の評判も極めて高く、成功裏に終わったと思います。

そういう中で、成功体験に浸っているだけで本当に良いのかなど。成功体験が失敗を生んだというのは、過去戦史に結構ありましてね、真珠湾攻撃の成功が、ミッドウエーの敗戦の一因になったということも言えるわけです。

やはり、成功体験だけではなく、その成功するための表に出ない地道な努力、つまりアヒルのみずかきの部分、これをやはり伝えていかなければいけない。これは私の責務だということのように思っています。足跡を消し去りたいところなのですが、一つだけ残して「イラクについては呼ばれたらいつでも話に行きますよ」ということでお話をさせていただいて

います。

そして、空幕にも、かかわった全員のアール・ヒストリーをしっかりと取って、記録に残し、次に同様なミッションが行なわれるときは、それを後輩が参考にできるようにしておいた方がいいよと、お願いしています。そういう関係で、本日は現役の航空自衛官も来られているようです。

本日は時間も限られていますので、回顧というつもりですが、論点を三つぐらいに絞ります。そこを中心にお話しさせていただきますと思います。

まず最初に情報について、2番目は隊員の士気をいかに維持するか、3番目は日米同盟、4番目はもし時間がありましたらその他ごまごまとしたことをお話ししたいと思います。

二、情報取得の重要性と困難性

まず情報についてですが、情報というのは作戦には欠かせない、これは当たり前ですが、今さらながら、情報の重要さとともに高価さ、ベリー・エクスペンシブなものだということが骨身に染みました。今さら、何を言ってるんだ」というふうに思われるかと思いますが。

3

情報というのは、インフォメーションの部分とインテリジェンスの部分があるわけですが、インテリジェンスの部分の情報を得るにはどれだけ大変かと。そしてインフォメーションも、なかなか日本にはそのデータベースがない、ノウハウもない。

2003年3月20日にイラク戦争が起きました。その1週間後、3月27日に私は空幕防衛部長を拝命しまして、総隊防衛部長から市ヶ谷に来たわけですが、着任の次の日に防衛局長室に陸海空の防衛部長が呼ばれました。防衛局長から開口一番「今度は行きませよ」「準備してください」ということを言われました。そこから6年間が始まったわけです。

我々自衛官も1991年の湾岸戦争後の悪名高き「小切手外交」、1兆3000億円、130億ドルを使いながら、「小切手外交」といって国際社会からばかにされ、しかも日米同盟も漂流したという苦い教訓がありましたので「これは汗を流さなければいかん、自衛隊の出番だ、今度は是非行かせ」ということで我々の意気込みもありました。

そのながら、何から手をつけていくのが良いか。作戦に必要な中東の情報、インフォメーションが全くないわけなのです。百科事典的な情報はあるわけですが「その活動内容はどの程度のものだ」「複雑さはどの程度なのか」「どの程度はどの程度なのか」「どの程度がどの程度なのか」

「イラク国内の情報はどうやって入手するのか」「バグダッドの情勢はどうなっているのか」「したがって派遣規模はどうするか、何を持っていて、何を訓練したらいいのか」「全く暗中模索状態だったわけです。

困った時の米軍頼みではありませんが、やはり既に派遣している米軍がいるので彼らから情報入手するのが最も確実で早い。その情報の窓口として横田にある第5空軍がある。当時、第5空軍司令官にワスコー中将がおられまして、我々は直接協力を要請しました。米軍というのはトップダウンの社会です。親亀こけたら皆こけるわけで、上が「ノー」と言えばみんな「ノー」になるわけなのですが、幸いにも当時の航空幕僚長の津曲空将とワスコー中将は非常に良好な人間関係を作っております。「全面的に協力しましょう」ということでした。しかしながら、やはり5空軍というのはしよせん出先機関なわけです。ありきたりのことの情報入手することはできましたが、機微にわたる情報というのはなかなか彼らも持っていない。持っていたとしてもそれはリリースする権限を持っていないということがありました。イラクの空を飛ぶのに実際にはミサイルの脅威などもあるわけです。

今回のイラク派遣の特徴としては、大きくは二つあると思います。一つは戦場の上空を飛ぶということです。

法律的には非戦闘地域、戦闘地域というのがありまして、我々は戦闘地域には降りることはできないのです。ですから非戦闘地域に降りているのですが、その途中の経路は戦場上空を飛ぶこともあるわけです。戦場を飛んでいる。したがって、ミサイルの脅威はどうしても避けて通るわけにはいきません。

英空軍のC-130が、ミサイルらしきもので落とされたこともあります、銃撃を受けて傷ついたC-130もあります、それで亡くなった兵士もいます。

そういう点が一つと、もう一つは長期派遣型ということなんです。一つは分屯基地を作ったのと同じことでして、約200人が暮らせる根拠地を海外に作りまして、5年間維持したということがあります。

そういう特徴がありました。我々は戦場を飛ぶのに、何が必要で、どういう戦技が必要で、どのような訓練をやったらいいか、ほとんど情報がありませんでした。そして、根拠地の治安は、テロ情報はどうなのか、警備は必要か、必要なら何をやればいいかということも、ほとんど白紙の状態から立ち上がりました。

いろいろ八方手を尽くして情報入手に努めたわけですが、やはり、先ほど申しましたよ

うに、情報というのは、インテリジェンスになりますと、非常にハードルが高い。しかし、それはトップの意向によって大きく変わってきます。

大きな転機が訪れたのが2003年の5月23日のクロフォードでの小泉・ブッシュ会談です。あの時に小泉首相は「自衛隊を送ります」と明確に言われたわけです。米側は「総理大臣が言うなら本物かな」というように思ったのでしよう、情報の入り方がすごく変わってきまして、かなりの情報が入ってきました。

ペンタゴンの米空軍参謀と防衛部長との間でも、防衛交流を定期的にやっていたのですが、その防衛交流でも非常にいい情報が入ってくるようになります。我々の質問に対しても非常に協力的に答えてくれるようになります。

その2カ月後の7月の26日に、イラクの特措法が成立しました。それで米側からすると「これは、本物だ」と思ったのでしよう。彼らは、情報というのは自分たちにとっても死活的ですから、それほど簡単にはリリースしません。また国によって露骨に差別します。イラク特措法を作るくらいだから「これは、本気だな」ということで我々の訓練に同乗教育と一緒に乗ってくれたり、実地に指導してくれたり、こういう訓練をやった方がいいよといったアドバイスを、あるいは装備品の資料を提供してくれたりしました。

しかしながら、その7月26日の特措法が成立してから、基本計画ができるまで、もちろんの国内情勢により、5ヶ月もかかるわけです。8月19日に起こった国連事務所爆破テロを受け、政府はさらに慎重になる。官房長官が派遣時期について「いつ派遣するの考え方は確定していない」と発言しました。特措法が出来たのだから、米軍や多国籍軍は自衛隊がすべにでも来ると思っているのです。米側からすると、いつまでたっても基本計画もできない。「何やってんだ」と。米側の苛立たちを肌で感じることもありました。

そこで、皆さんも覚えておられるかもしれませんが、アーミーテージ発言なのです。「国際貢献、イラクのミッションはお茶会じゃない」「ティーパーティーじゃない」と。そういうように上が揺れますと下の方への情報がなかなかスムーズに流れてこなくなる。準備の実務者としては、「情報というのは親ガメにけたら皆こける」を実感した次第です。

それでも12月9日に基本計画ができて、無事12月26日、クリスマススの日に先遣隊を送ることができました。年明けて1月22日にC-130が出発し、3月3日から航空輸送任務を開始できました。これは日本にとって異例の速度なのです。

ここで韓国空軍の例を少しお話ししましょう。韓国は我々が派遣を決定し、準備し出す

と、我々の動きを真剣に注視していました。「航空自衛隊が派遣したぞ」「なんかうまくやってる、えらい早い速度でやってる」じ。

韓国政府は我々がミッションを開始した3月3日、2004年の3月3日なのですが、それから遅れること7ヶ月後の10月に派遣を決定するのです。情報作戦参謀副長というのが防衛部長のカウンターパートで、年に2回交流しています。私が行って、向こうが来る。その時に「航空自衛隊は、米軍から情報貰ってうまくやってるようだがどうやってるんだ」と言うことを聞かれました。さらに「派遣について教えてくれ」ということを言われたわけです。

私がまず言いましたのは「おたくの司令部の隣に米軍がいるでしょう。我々は、米軍からの情報が大半です。まず米軍から聞かれた方が正確だと思いますよ」と。すると彼らは「いや、なかなか教えてくれない」と言うのです。

その時の韓国の情勢はどうであったかといいますと、女子高生が米軍の装甲車にひかれて死んだ事件がありました、盧武鉉政権時代で、マスコミがこれを煽って反米のデモが起っていました。米側から見れば盧武鉉政権は親北反米で、全方位等距離外交であるとか北東アジアのバランスになるなどということ言っていて、米軍から離れようとしている
6

そうしますと、米軍との情報のパイプはなくなってしまっわけです。それで韓国軍は非常に困っていました。私はその話を米空軍の某准将と酒を飲んだ時に持ち出し「なぜ、情報をやらないんだ」と言ってやりました。すると「いや、実は今、情報をやったら全部北に流れるんだよ」と沈痛な面持ちで語っていたのを覚えています。

ですから同盟の枠組みがあっても、上がどのような政権であるかによって、情報の流れがストップしたりするということがあり得るわけなのです。

ということまで「空自が教えてあげられることは教えてあげましょう」と、韓国空軍の派遣についても空自が指南役としてのミッションを果たしたということがありました。

次は派遣後の情報についてですが、これはもうほんとに死活的なんです。毎日どこで戦闘をやっているか、その戦闘をやっているいちばん脅威のある所を我々は回避しなければいけない、日々の情報は本当に死活的に重要なのです。

航空自衛隊が多国籍空軍と違うところは、我々は特措法を根拠に任務を遂行しているわけ、汗を流しても血は流さないということです。彼らの常識は「軍隊というのは時に血

を流すのはやむを得ない」と。そして「C-130は撃たれても落ちないから大丈夫だ」「ミサイル1発じゃ落ちないんだよ」と。マンパツという携帯ミサイルで、実際に撃たれていますがエンジンが四つついていきますから1個破壊されても緊急着陸すれば大丈夫なことが多いのです。ですから「緊急着陸の訓練をしておけば大丈夫だ」というように簡単に言うわけです。

根拠の特措法から判断すると、それを是認することはできないわけです。撃たれてもしたら、それは戦闘地域ではないかと、朝野を挙げて大騒ぎになり、撤収騒ぎになる可能性があります。危険を自ら未然に回避しなければいけない、という使命があるわけです。

そういうところが大きな違いなのですが、もっと違うところは、やはり血を流す同盟か、血を流さないかということなのです。イギリス軍とオーストラリア軍に対する情報と日本に対する情報、韓国に対する情報は明確に差がありました。情報には差別があるということを、しみじみ実感させられました。

例えば、我々は情報を取得するためネットワークに入るわけです。米軍が主となった多国籍軍ネットワーク、「セントリック」というネットワークに入っていたわけです。これによって航空輸送に必要な情報は得られます。

戦いに必要なネットワークは別に「シッパーネット」というのがありまして、これに「入らせてくれ」と私はもう5年間ずっと言い続けてきましたが最後までだめでした。

こちらは日々戦闘に必要な情報です。情報というのはニード・トゥー・ノウ・ベイシスというのが原則で、必要なものがその情報にアクセスできるようになっているわけです。だから、「戦闘をしない空自は必要ないだろう」というのです。我々は戦闘はしないとはいえ、戦闘がどのようにどこで行なわれていたというのが分からないと「情勢の全体像が掴めないじゃないか」と、非常に疑心暗鬼になるわけです。これについては一生懸命努力してアクセスしようとしたが、最後までだめでした。

あるいはこういうこともありました。フライトの前に、毎朝当日の戦闘状況や脅威情報というデータをくれますので、それをパソコンの地図に入れて、そのパソコンを見ながら経路を選んで飛ぶ、というソフトウェアがありました。それを現場の隊員たちが一生懸命頑張って、良好な人間関係、信頼関係を構築し、現場レベルで取得していたのです。

実はその情報ツールは正式には空自にリリースされていなかったのです。ある時に米軍の担当官に見付かってしまっていて「なんだ、これ」「これは日本にはリリースしてないはずだ」ということで、そのソフトウェアをダウングレードされました。使えなく

なってしまうわけです。

私は頭に来まして、そっちがそついつ態度だったら、こっちにも考えがある。」よくわかった」ということで、「安全が確保できないから空自は飛ばないと見え」と現地に指示しました。ちょうど次の週に、あるVIPを乗せてバグダードに行かなければいけないというときです。この重要なミッションに「飛ばない」と。「飛ばなかったら、何故だと聞かれるぞ、その時、司令官は事情を全部話すからな」とを米軍側にも言い、ワシントンには駐在武官を通じて「もう飛ばない、飛ばない」との司令官の意図を伝えてもらいました。けつをまくってストライキを実行したわけです。そうしましたところ、アットという間にペンタゴンの上層部上っていきまして、結果、1週間で元通りになりました。

やはり同盟に傷がつくと思ったのでしようが、事ほどさように現場レベルではしようがないところがあります。現場の権限ではありませんので。

そついつ話とか、あるいはミサイル・ウォーニング・システムというのがありますが、このミサイル・ウォーニング・システムはミサイルが発射されると、そこから出てくる紫外線、赤外線を探知して、熱源を放射する☒デコイを放射するようなシステムなのです。

これはリリースされていますが、そのフレアの撒き方までは決してリリースされないのです。米軍にとっても死活問題ですから、それが敵の手に入りますとその裏をかかると自分たちが危うくなるということです。

情報については「現場レベルでも、可能な限り情報入手に努めよ」と指示しておりました。トップダウン社会の反面、現場レベルの人間関係に負うところ極めて大、といったところがあるのもまた事実です。「情報をくれない場合は、積極的に取りにいったらいい」ということで、隊員たちも頑張ってくれましたが、日本人の奥ゆかしさは封印し、ずうずうしいまでの積極的な態度は極めて有益でした。

5年間ぐらい一緒になって汗をかきますと現場レベルで連帯感ができます、良き人間関係ができます、そして信頼感が醸成されます。そうすると、かなりのことが非公式でも教えてもらえるようになります。

中東における米空軍、多国籍軍の作戦については、米軍の作戦司令部というのが中東某国にありまして、某国というのはもう新聞でも出ていますが、私は言えないことになっておりまして、あえて中東某国と言わせていただきますが、ここで米軍は中東の作戦全部を仕切っています。アフガンの作戦、イラクの作戦、ホーン・オブ・アフリカ、ソマリアの作戦、三つの作戦全部をそこで実施しているのです。

そこに10名航空自衛官を常駐させまして、情報を取らせるようにしました。私もそこに最初に行ったとき、私が防衛部長の時点で、現地でのように支援してくれるかという取り決めにサインをしい行ったわけですが、非常に歓迎してくれました。同盟国日本が「よく来た」という感じで、大々的なセシモニーもやってくれました。

その時、作戦司令部に入りますと、五つのスクリーンのうち一番右がパシャッと消されるのです。私は気が付いていなかったのですが、当時、計画部長で派遣されていた某1佐が「部長、気がつきました？ いちばん右の画面が消されたのが」と。やはり日本には教えてくれない、見せてくれないわけです。「なんだ、同盟国なのに」と少々憤慨しました。しかしながら、2回目に行ったときは、もう既に相当期間一緒に汗を流してミッションやっていましたので、良好な人間関係、信頼関係ができていましたから、ちゃんと見せてくれました。実は無人機の偵察映像だったのです。

その時でも、インテリジェンス・ディビジョンというのは2階にありまして、そこは立ち入り禁止だったのです。「中を見せてくれ」といっても「だめだ」と。3回目に行きましたら、見せるどころか、そこでフリーフィングしてくれるのです。やはりこれくらい共に汗をかくというのは違うんだなと思いました。

4回目の時などは、もうどこでも見て、何でも聞いてくれということでした。私が行く1週間前にザルカウイ容疑者の捕獲作戦、ザルカウイ容疑者を殺した作戦ですが、その1週間後ですから、私はあえて意地悪な質問をぶつけてやりました。「ザルカウイ容疑者を攻撃した時の作戦をフリーフィングしてくれ」と。さすがにフリーファーはギョツとなりまして、上司の方を見て「いいのでしょうか」というような感じです。上司は「大丈夫だ。やれ」ということで、それもフリーフィングしてくれました。

やはり「同盟」というのは紙ではない、連帯感だ」と、これはキッシンジャーが言ったことですから、それを痛切に感じました。

信頼関係にダメージがあったのは、期間中2回ありました。1回目はイーススの情報漏洩のときです。あのときは、やはり空軍と海軍の違いがあるとはいえ、非常に米側は疑心暗鬼になっていたのが分かりました。それでも我々は人間関係と日頃の行動でリカバリーしたわけです。

2回目のときは、これは我々のミスなんです、ある隊員が自分のコンピュータを持って帰国する時に、普通ハードディスクを全部消去するんですけど、データが若干残っていたのに気がつかなかった。それが、いわゆるウィニー事案で情報が漏れてしまった。

その隊員はコンピューターの専門家と聞いていいほど詳しいのですが、それが裏目に出てしまった。これはもう米空軍と空自との信頼関係上でもなにかいじわるなのですよ。

その時、私は速やかに「ザクロ作戦」をやねと指示しました。「はらわた見せるザクロかな」で「全部見せる、漏れたところを全部ハードコピーしろ」と、ハードコピーは積み重ねると大体15センチくらいになるのですが「全部米軍に見せる」と。そして、すぐ詫びを入れると同時に「これが漏れたすべてだ、これ以外ない」「この影響をインテリジェンスで調べてくれ」「まじとこ申し訳ない。じじいじじいとは今後絶対ないようにする」ということで、すぐ謝りに行かれました。

そしたら、米軍の担当者からは「じじいじじい、こんなに速やかに連絡してくれてありがとう」というメッセージが来ました。結局調べてもらってその回答は「全部期限切れの情報だから影響はない、これから気をつけてくれ」ということで終わりました。情報というのは非常に貴重で、信頼関係によって成り立つものなのです。

悲しいかな日本は、航空自衛隊も防衛省全体としても、作戦を海外でやろうとした場合に日本独自の力で情報をとる能力はありません。将来的にどうするかは別として現段階として能力がないのは事実です。だからこそ、これからも海外で活動するという場合に、やはり頼りになるのは米軍だろうなど。頼みは米軍のノウハウであり、インフラであり、情報インテリジェンスのシステムだと思います。

ですから、マスコミなどは「アメリカにベッタリだ」などとすぐ攻撃しますが、そんな浅薄で幼稚な話ではなく、能力がないので有れば、アメリカからいかに情報を取るか、そのためにどうしたらいいか。あさましいまでの狡猾さが我々には求められるのではないかと思うわけです。

イギリスとオーストラリアも同様に自らの弱さを自覚しています。イギリスやオーストラリアの将校とアメリカ人抜きで話しますと、彼らはこう言うのです「アメリカというのは5万トンタンカーだ。すごい能力を持っている。キャパシティーは大きい。とてもかなわない。その5万トンタンカーを自分たちの思うように動かすにはどうしたらいいか、押してもだめだ、引いてもだめだ、いちばんいい方法はコックピットの中に入って、舵を握ることだ。その舵を握るためには時には血を流す覚悟が必要だ」と。

なるほどと思ったのは、その中東某国の司令部のそれは三つのエリア全部を統括して24時間で作戦をやっているわけですが、その総指揮官は米空軍のノース中将です。彼は通常はフロリダにいて重要な作戦のときに来るのですが、日常やっているテラーベースの

作戦というのはその副指揮官がやります。

その副指揮官というのはアメリカとオーストラリア、イギリスの准将です。これは、ほう大な戦力をイギリスの准将が、あるいはオーストラリアの准将が動かしているときがあるということの意味します。

ということは、イギリスとオーストラリアは戦うための情報はアメリカと同じレベルを持っているということなのです。「なるほど」「情報というのは高価で重要で欠かせないものだけでも、それを取るためには文字通り血のじむ非常な努力をしているな」と感じました。

これが情報です。将来的には自らの手で情報収集できるようにしたほうが良いのでしよう。情報というのは恐ろしいです、情報を握られますとほんとにいいように動かされてしまいます。自分らの手で収集し、自分たちの手で分析し、判断できるようにならないといけないのですが、今からそれをセンサーも含めて整備しようとするので、10年20年ではできないと思います。しかしその方向性は、追及していく必要があると私は思います。

三、隊員達の士気の維持

次に、隊員たちの士気を維持するのに、どういうことが必要か、これはほんとに政治家の皆さん、あるいは国民の皆さんに、私は指揮官の視点からお願いしなければならぬ事があります。結論から申しますと、国民の理解と支持、そして大義名分がないと隊員たちの高い士気は維持できないということです。

マスコミを含め、国民の皆さんは一つの大きな誤解をされていると思うところがあります。す。

一つ目は、自衛官はどんなところでも喜んで行くと思っている点です。国のためであればどこでも喜んで行くと思っている、自衛隊は日本社会の縮図です。自衛官といっても、現在の学校教育、つまり「個」を重視した教育を受けて育ち、平均的な若者とマインドは変わりません。ただ、自衛隊に入ってきたあとに、いささかなりともしっかりとした教育を受けるから、変わるのであって、根柢の価値観やマインドは一般国民とほとんど変わりません。やはり、きついことは嫌がるし、危険な目には遭いたくないのです。自衛官を特別な人間だと誤解している人が多い。意図的に誤解しようとしているのかも知れませんが。

あるOBが某新聞に次のように書かれました。「自衛官は命せられたら、身命を賭して任務を遂行し得る心構えと技能が出来てる……」と。自衛官についていわはすいへん名譽であ

りがたい。格好は良いのですけれども、これを前提に安全保障を考え、これに依存していたら近い将来失敗すると思っています。

そうではなくて、普通の日本人の集まりだということ为前提に、物事を考えなければいけない。普通の日本の若者に若干の自衛隊教育を施しているだけなのです。

2番目の誤謬は、自衛官は安全な所にしかいかないと思っていますことです。これはとてもない誤りです。国際貢献というのは、だんだん高度な難しいミッションが与えられるようになりました。現在、ムートウという言葉があります。MOOTW、ミリタリー・オペレーション・アザー・ザン・ウォー。戦争ではないけれども軍隊の役目なのだ。つまり軍隊がやる必要はないのですが、しかし軍隊しかできない、だから軍隊がやるのだ、というのがMOOTWです。イラク復興支援活動もインド洋での給油活動も、海賊対処もそうなのです、軍隊しか出来ない任務ですから。

その二つの誤謬をしっかりと認識した上で政策を考えなければ、今後の国際貢献活動は早晚破綻する可能性があるのではと懸念します。というのは、隊員が現地で「私、辞めます」と申し出があった場合、どうしようもありません。冒頭に申しましたように、軍法会議がない軍隊なのです。諸外国の軍隊では、戦地で「私、辞めます」と言ったら、軍法会議で最低限禁固刑です。今も脱走兵、逃亡兵というのがドイツに逃げて問題になっていきますけれども。

ということは、やはり我々は国民の理解と支持、そして大義名分「何のために行っているのか」ということが心のよりどころとなっている。これを、しっかりと明示してやらないといけない。そして隊員たちのマインドの琴線に触れるべく「頑張ってきてくれ」と、帰ってきたら「ご苦労さん」という国民の支持と理解が欠かせないのです。

私はイラク派遣の指揮をとりまして、考えを新たにすることがあります。「武士道とは死ぬことと見つけたり」とする「葉隠れ」というのがありますが、あれは太平の世の中にならなくて書かれているのです、死ぬことが少なくなった世の中だからああいうことが言えるのだ。「事に臨んで身の危険を顧みず……」などというのは、身の危険がないから言えるので、実際に身の危険があればそういう言葉は決して出て来ません。

そういう身の危険を顧みずやらなきゃいけないようなミッションもフィクションでなく現実として目前にある。2006年7月に私は航空支援集団司令官を拝命しました。その時、陸上自衛隊が帰国し、空自はバグダッドを含めたミッションの拡大がなされました。以前より格段に危ないところに行くようになった。毎日のように攻撃情報がある。我々の

ミッションでも、15分後に我々と同じ経路を飛んだイギリスのC-130が攻撃を受けたことがある。あるいはバグダッドを離陸する前に、離陸許可を待ってたんですが、その機上を4発ロケット弾が飛んだということもありました。

本当に危ないのです。危ないミッション、今後の国際協力、国際貢献活動というのは、益々こういう難しいミッションになってくると思います。

そうしますと、やはり隊員たちはギクシャクするわけですし、また動揺もします。「なんで、おれたちはこのミッションやるのかな」と、究極的にはそこへ落ち着くわけです。彼らと酒を酌み交わし、よくよく話を聞いてみますと、「あ、なるほど」と思ったことがあります。いちばん責任を持たされる機長クラス、それもベテランの機長ですが、彼らは冷戦の時に自衛隊に入ってきているのです。

祖国防衛のために自衛隊に入ってきているのです。国のために、国家の危急存亡のときに血を流す、そんなものは当り前だと思っっているわけです。ただそれが、2007年の1月からは、いわゆる国際平和協力、国際活動が本来任務化されましたが、「じゃ、何のために行くのか」という疑問については、国論も一致していないし、国家として明確な回答を彼らに出していないわけです。

そうしますと「我々は、何でこんな過酷な任務を、しかも危険な任務をやらなきゃいけないのか」「これで、何に役立っているんだ」というのが、本当に疑問になるわけです。

必要なことは、国家として国論が一致した明確な大義名分を隊員達に与えてやらなければいけない。それが今必ずしもできていない。であるなら、指揮官が隊員たちに大義名分を明示してやらねばならない。これは私の任務だということで、小牧やクウェートに行っ

て隊員達に講話や訓示をしました。

では、イラク派遣における大義名分は何か。当時、防衛庁長官は訓示の中で五つ示されました。

一つめは、イラク国民が自らの国を復興するのを手伝うのだ。2番目は、国連の決議に基づく活動、国連の加盟国としての責務である。3番目は、中東の安定というのは日本の利益そのもので、欠くことはできない、だからこれに貢献するのは非常に重要である。4番目は、イラクの石油の埋蔵量は、中東ではサウジに次いで2番目である。このイラクが安定した暁には、日本は石油が必要なので今投資しておくことは大切だ。5番目が、日米同盟というのを結んでいる、アメリカが困っているのを助けるのだ。

概略こういう5つの大義をこの順番で話されました。その時に、隊員たちの心に響いて

いるかというところ、そうではなかったのです。イラク国民が、イラク国を自らの手で再建するために頑張っている、それを手伝うのだといったときに、彼らの皮膚感覚でそれが理解できるかというところ、それは出来なかったわけです。サマワの陸上自衛隊を支援しているときはまだ良かったのですが。

私もバグダッドに行きました。バグダッド行っても、どこに行っても、空自隊員はイラク人と会うことはありません。会うのはアメリカ人です。荷物を搭載・しゃ下するのもアメリカ人がやってくれるわけです。そして運ぶ兵士は大多数がアメリカ人、それで、アメリカ人に感謝される。というふうになりますと、政治がいつところの大義名分では隊員達の心には響かないのです。

そうしますと、隊員たちの心には必ず動揺が起きる。「何のためにやってんだらう」「おれたちは、こんなことでほんとにいいのか」と。「はい、私は辞めます」ということが、よく出てこなかったなど、ホッとしているのですけれど。

彼らの心にストント落ちる大義名分を与えなければいけないということで、私が繰り返し言ったのは「これは日米同盟のためだ」ということです。「日本という国は残念ながら、是非・善悪は別として、独自で日本を守れない。北朝鮮からのミサイル攻撃にしても、尖閣にしても、竹島、北方領土もそうだし、我々は自分だけでは我が国を守れない。守れないからこそアメリカと同盟を結んで、アメリカの力を借りなきゃいけない。だから日米同盟を常に活性化しておかなければいけない。そうする事によって安全保障は成り立つのだ」と。

「そのためには——同盟というのはガーデンニングだ——という駐日アマコスト大使が言っていた言葉がある。ガーデンニングというのは、ちょっと手を抜くとすぐ荒廃してしまう、だからこそ常に手を入れとかなきゃいけない、だから我々がやっていることが、これだけアメリカに感謝され、日米同盟の緊密化に役に立っている」「だから君たちがメソポタミアの空を飛ぶ事によって尖閣を守り、日本海を守っているんだ」「お前たちが日本を守っているんだ」ということを、繰り返し言ってきました。

実際私もそう思っていましたし、日米同盟のためだという大義名分は隊員達の皮膚感覚にもフィットするところがあつたと思っています。

在任中、私は常にそれを主張してまいりましたが、反省してみますに、政治のいう大義名分と、指揮官のいう大義名分が完全に同一でないというのは、理想的なことではありませんが、「防衛庁長官の言っていたのと同じくらい正確じゃな」「うか、」「いやアしも正しいけれ

ども、実際は「じいなんだよ」「実は、じいだ」という言い方はしないのであれば、これに越したことはありません。

ですから、指揮官としては、政治の世界での言葉がそのままで隊員達の士気向上に役立つようにしてもらいたいという思いがありました。

それと、やはり国民の理解と支持というのは、これはもう欠かせません。隊員たちが小牧から出ていく、その時に私は居たたまれない思いをしました。正門の外ではデモ隊が押し寄せて、シュプレヒコールを浴びせかけられながら、石もて追われるが如く隊員たちが過酷な任務に付くという状況は、指揮官としては本当に居たたまれなかったわけです。

官舎にはイラク反対のビラが配られ、民主党はイラク廃止法案まで出されるということ、任務につく彼らにとっては大変な思いなのです。さらに名誉、誇りを傷つけられるようなことまで行われる。

我々がチャーター便で出発する時に、「日本の国旗のついた飛行機で行きたい」と願っても、JAL、ANAは「イラクについては協力しません」ということで、1回もJALとANAのチャーター便には乗せてもらえませんでした。「もういい」ということで、タイ航空とかブーケット航空、マイアミ航空などを使用しました。最後は、おれたちの手で帰すんだということで政府専用機——政府専用機は途中何回かありましたが——最後は政府専用機で迎えに行きました。

しかもチャーターではない民間の飛行機に乗るときは、迷彩服はやめてくれ、戦闘服はやめてくれと言われる……「こんな国ってないよな」と。政府が命じて「ひとつ一肌ぬいで頑張ってくれよな」と言ってるものを、国民はどういう心でそれを送るんだということ

を。

私は今の隊員たちはまだ物分かりが良く、問題ないと思いますが、将来もっとドライな若者が入ってきたときに、入隊後の自衛隊の教育だけでは、もたないかもしれない私は危惧するのです。やはり国民の皆さんが「是非行ってくれ」と、国論を二分するのではなく「政争は水際まで」というあのアングロサクソンが使った言葉どおり、水際、つまり日本から外に出て行くときは国論が一致して拍手して送り出すという姿勢……オバマがそうです、大統領の選挙の時に彼は何を言ったか「私はイラク戦争に反対だ」「すべ、撤収させる。しかしながら行っている兵士の諸君には責任はない、無事の帰還を祈る」「じいじいことを言われた。これが普通の国家だと私は思うのです。

そうじいじいしているうちに、違憲判決もありました。ああいう違憲判決や民主党のイラク

廃止法案などというものは、ボディブローのように効いてくるわけです。F-15隊もそんなのですけれど、ボディブローとは何かとついでついで、隊員の家族が動揺するのです。「お父さん、ひょっとして何か悪いことしてるんじゃないか」と、そうしますと、当然足下から揺らいでくるわけです。

イラク廃止法案が出されたときも、優秀な若いパイロットの隊員が辞めました。辞めた隊員の所感文を読んでもみますと「我々のやっていることは、ひょっとして間違いかもしくない」ということを書いていました、動揺が現れている。彼は冷戦の時に入ってきたのではなくて、冷戦後に入ってきた副機長ですから。国際平和協力活動、あるいは国際活動について、志（こころざし）を持って入ってきたと思うのですが、しかしながら、あれだけ反対運動あるいは廃止法案が出ますと、動揺しない方が不自然かもしれません。

イラク違憲判決もありました。違憲判決が出ようが出まいが、我々は政府の責任、政府の命令で行っているわけです。命令が出たらそれを遂行する、それが軍人ですから。

判決が出た時、心配された当時の田母神空幕長から、すぐに電話がありました「部隊の隊員はどうだ、動揺はしていないか」と言われるので「直ちにどうこうということはありません。しかしながら、この傍論は純粋な若い隊員の心を傷つけることは確かです」「我々は政府の命令で行っています。だから特に関係ありません」と言うことを申し上げました。そしたら田母神さんは、記者会見で「そんなの関係ねえ」と言って下さって……隊員達は救われた気になりました。私はすべ「ありがとうございました、隊員はあれで救われました」と申し上げました。実際そうなのです。

隊員たちは動揺しながらも、ほんとにしっかりと5年間のミッションをやってきたわけですが、それはクルーの使命感と早い話が浪花節的人間関係なのです。「おれが今辞めたら同僚は困るよな」「5回目のやつが、また6回目に行かなきゃいけない、だから辞められないな」と、そういうものでもっているのです。

そういう綱渡りのなことでほんとに良いのでしょうか、これから国際貢献活動というのは、どんどん増えていきます。しかもどんどん難しいミッションになっていくでしょう。そのときには、やはり国論を一致させて国民の理解と支持のもとに派遣しないと国際貢献活動は立ちいかなくなる可能性がある。「行っついでついで、頑張ってくだわ」といって一言、帰ってきたら「苦勞やん」の一言、それがほんとに言えないのかということ、指揮官として本当に残念に思いました。

デモ隊の人たちには「小牧に来るのは間違いなのじゃないですか」「あなたたちは永田町

に行くべきです」と、ほんとに言いたかったのですが、それを言ったら、司令官をクビになっていたかも分かりません。でもほんとにそれは心から思いました。

四、日米同盟について

次に、日米同盟について、国際活動の立場からお話します。

日米同盟、アメリカからは六つの傘によって庇護を受けているというか、傘の下にあるといわれます。

核の傘、これはご存じのとおりです。次は先ほども言いましたように情報の傘です、あと攻撃力の傘、攻撃力を持ちませんので、そして軍事技術の傘、アメリカの軍事技術というのはすごいものがあります。あとエネルギーの傘、石油も欧米のメジャーが支配していますし、あるいはシーレーンもそうです。あと食料の傘、と、この六つなのです。これは残念ですが、現実の姿なのです。その現実を受け止めて是非・善悪は別としてこれを前提に我々は安全保障を考えていかねばならない。

イラクへの派遣で、全面的におんぶにだっこだったのは、情報と救難態勢です。

イラクで撃たれて砂漠に緊急着陸したとします。助けてくれるのは米軍です。我々200人ぐらいしか行っていないので、救難の能力は全く持っていないませんでした。

救難態勢というのはもう米軍だけです。米軍におんぶにだっこ、ですから米軍の救難用無線機を持ち、その使い方教わり、そして助けに来たときにどういう手順をとるか、それも教わり、訓練もやりました。

医療救急態勢もそうです。もし、瀕死の重傷を負った緊急の場合にどうするか。ドイツのラムスタイン空軍基地に大きい米軍病院がありますので、そこに搬送するという手順を我々は決めていました。こういうものを、日本で独自でやるうとしたら、とんでもないお金がかかる話であって、それはアメリカをうまく利用せざるを得ない。

これからの海外活動、国際活動は将来的にはある程度、情報などは日本で持つ必要があるとは思いますが、見通し得る将来は、やはりアメリカをうまくやっていくしかない。アメリカが嫌いだとか好きだとか、そういう話ではなくて、そういうのはどの程度でもいいわけ、我々国益のために働くわけですから、そのときにはミッションを成功させるために、アメリカをうまく活用してアメリカをうまくやっていくしかないと思います。

アメリカのインフラを活用し、情報を活用し、ノウハウを活用する。これは一石二鳥のところがあります、アメリカをうまくやりますと、アメリカとの連帯感が出来ず。結果

的にミッションもつまへいく。と同時に連帯感が出来ます。日米の軍人同士が海外で良好な関係を作りますと、日米同盟にも必ず良い影響が出てきます。ひいては日本の防衛にも直接役に立つ。同盟というのはやはり連帯感なのです。

どれだけ感謝されているかということ、 Cheney 副大統領が来た時に、陸海空のシニア・オフィサーに会いたいということ、 統幕長と陸・海の将官、空は私が横須賀に会いに行っていました。

そのとき、いろいろ話がありました。私が自己紹介のときに、イラク派遣の航空の指揮官だと言ったら、私の方につかつかと寄ってきました、あのグループのような手で私の手を握り締めて、ハスキーボイスで「サンキュー」と言われました。

ネオコンが孤立して、米国がどんどんたかかっているさ中であって、日本が協力してくれた、というのがあったでしょう。ペンタゴンに行ってもどこに行っても、我々が航空自衛官だとわかると、近寄ってきて「ありがとう、ありがとう」ですから、やはり日米同盟の活性化という観点からは、非常に貢献したのではないかと思います。

それと対象的なのが、1991年の湾岸戦争のときでしょう。日本人は老若男女、大人も子供も全員が一人100ドルずつ払い、1兆3000億円も払っておきながら、「小切手外交」と笑い物になりました。

あの時、日本の米国駐在武官はペンタゴンに事実上立ち入り禁止になったそうです。日米同盟はあそこから漂流して、失われた90年というのが始まったといわれていますが、やはりそういうようになってしまいましたと、軍人同士の付き合いも「こいつらはもう、同僚に値しない」という話で、日米間は「同盟に値しない」というようになってしまっています。

そういうことから、湾岸戦争の轍を踏んではならないということで、今後の活動もアメリカとできるだけうまくやっていく、ということが必要なのではないかと思えます。

あの湾岸戦争の時に、掃海艇で行った海上自衛隊の幹部から聞きましたが、何がきっかけかといいますと、休日に港に入って多国籍軍の海軍のパーティーに出たら、「何で日本は、冷戦の恩恵を受けておきながら、冷戦が終わって新しい世界新秩序を作ろうというときに、協力しないのだ」ということを言われたそうです。

「いや、そうは言っても憲法があってなかなか出来ない……」と、四の五の言って、苦し紛れに「その代り一人当り100ドルずつ老若男女税金を払って支援したんだ」と言ったら、相手は烈火の如く怒って、「分った」「お前に100ドルやるから戦場に来い」と言

われたそうです。もう涙が出るほど悔しかったそうです。

それと比べると格段に私はいい関係ができたと思います。ただし、同盟はゲーテニングなのです。常に手を入れていかなければいけない、今後どうするかによって、ほんとうにでもなる。またボトムに落ちることもあり得ると思います。

1991年の湾岸戦争のとき、それからざっと10年間を見ていただいたら分りますように、細川さんとクリントンの会談や、日米構造協議が決裂したり、半導体20%の数値目標とか、いろいろありましたが、もうこんでもないような90年代だったわけです。それを何とか現状まで回復できたのは、小泉さんの力もありますが、隊員たちの流した汗のお陰というのも大きいと私は思うわけです。

今後アメリカをうまく活用していかねばならない。アメリカべったりだとか、ブッシュのポチだ、アメリカ追隨だ、などとマスコミはすべ非難しますが、それは日本の実力、弱さを自覚していないからだと思います。

我々、安全保障を担当する者はリアリストでなきゃなりません。徹底してリアリズムを追求しなきゃいけない。今の弱さというものを直視した場合、イギリス、オーストラリアは、先ほど5万トンタンカーの話でお話したように、なかなか、現実的な素晴らしい考えを持っていると思います。さすがは功利主義の国です。自分たちの国益のためには、だますこともあるし、時にはプライドを捨ててひれ伏すこともある。あさましいまでの狡猾さを平気で示す。我々も、賢明か愚昧かという評価基準で物事を考え、賢明な策を取らなきゃいけないのじゃないかな、と思うわけです。

五、これからの国際貢献

次に、時間が若干ありますので、その他思いつくまま、小さいことですが、お話しさせていただきます。

日本では国際貢献というように言いますが、外国ではインターナショナル・コントリビューションといっても通じないのです。米軍人からコントリビューションというのはティンカップだといわれたことがあるのです。ティンカップというのは何かというと、錫のカップで、ホームレスが金を恵んでくれといって、置いてあるティンカップらしいのです。コントリビューションというのはティンカップに25セント入れるのがコントリビューションだというふうにいわれたことがあります。

なるほど、そんな「軽くものかわ」。コントリビューションはやはり命は張れないなと。

やはりそれは国際責務、日本の国際的責務だとしつこく論議が統一しなければいけない。つまり日本の国民の認識を統一してもらわなければいけない、国際的責務だから国益に直結している、だからこそ「日本人を代表して日本人の善意を行使してきてくれ」、「じつじつ意識がないと今後はなかなか難しいだろう」と思います。

「コントリエーション、国際貢献」という言葉は、何か片手間にやっているというイメージがあります。多分そういうことでは今後は立ちいかないのでだろうと懸念します。ますます難しいミッションになってくると思います。そして身の危険も顧みずにやらなければいけないような任務になってくるでしょう。そこではやはり国際的責務、それに基づく大義名分をしっかりと与えてやらなければいけないだろうなと思うわけです。

次に、ファミリーケアということをお話します。昔の言葉でいうと「銃後の守り」というのですが、日本ではなかなか、ファミリーケアという言葉自体がない。まだ市民権を得ていないところがあります。

「坂の上の雲」に、「妻は病床に伏し、児は飢えに泣きながら国事に奔走をした幕末の志士たちは……」という記述がありますが、これを今の若者に要求しても無理です。時代が違いますから。

20

実際にこういう例がありました。私が帰ってきた隊員の所感文を読んでもありました。ある隊員が、派遣中に妻が病気になったことを書いていました。子供が3人いました。乳飲み子が病気になる、というのはまだいいのです。奥さんがしっかりしていれば。その家庭は奥さんが乳飲み子を3人抱えて病気になってしまった。「私は中東の地から祈るしかありませんでした」と、こういう所感文です。

「これはいかん」「これは何とかせよいかん」と、こういうのを放置していると、早晚「私、行きません」という隊員が続々と出てきても不思議ではなくなる。何とかできないか。とりあえず、今できる方法は、基地の医官を往診に行かせることだ。これが出来るのか、どこか、駐米の首席衛生官に「法的に問題があるか検討してくれ」とお願いしました。すると「OKです。法的に問題ありません」ということになりまして、基地の留守家族担当には「御家族に用聞きをします」と「奥さん、お元氣ですか」「調子が悪かったら医官を送りますよ」と。じつじつとをやらせるようになっていました。

家族の負担というものは、これは極めて大きいものなのです。3回、4回5回と行きますと「お父さんは、毎年4ヶ月間は家にいない。でも厳しい任務で海外に出張して、苦し

い思いをしている。だから我慢しなければ」ということになります。壮行会の時に御家族が来られますが、私は指揮官だから、家族のところを回って「奥さん、大変ですね」と声をかけます。すると「いや、そんなことありませんよ」という奥様は一人もいませんでした。みんな首を縦に振って「大変なんです」と言っていました。それは正直なところだと思います。

アメリカなどは、やはり軍の長い歴史があります。ロバート・ゲイツ国防長官が、我々のミッションが12月終わりましたら、すべ浜田大臣に書簡を送りました。その書簡には、「家族の絶大なる支援の下に」「ありがとうございます」といって書いてある。私のところにもノース中将から、メールがきましたけれども「どうもありがとう」「家族の多大なる支援の下に……」と、これは決まり文句なのです、いちばん最初に、フライオリティ、ナンバーワンで入ってきます。

撤収が決まった時、総理大臣談話がありました、その談話を見ましたが、家族のことは一言もありませんでした。ある新聞記者に「ちょっとこれ見比べてみよう、何が違うか」と、尋ねましたら、しばし見つめて「違いますね」と感心していました。次の日の朝刊に家族の犠牲について記事が載っていましたが、その影響か、さすがに帰国歓迎会の麻生総理の訓示の中には「家族のご支援、家族の犠牲」というのが4回も出てきました。

しかし、これは笑い事ではなくて、家族の負担をどのように軽減するかというように、今は、今まで経験したことがありませんが、国として考えなければならぬ。今まで自衛隊は国内で戦う、国内で活動する軍隊だったわけですから。それが外で国際活動するようになった。そうしますとやはり、子供を預ける保育所であるとか、医療、家庭の往診などの、家族支援、これは片手間ではなくて、しっかりとやらなければ「妻は病床に伏し児は飢えに泣く」では誰も国際活動に従事しようとしなくなる。そう懸念するわけです。

次に、指揮官の私が痛切に感じ、後輩たちにも言っているのは、やはり「出口のないトンネルを走る、これほど辛いことはない」ということです。いつ終わるともいれない過酷な任務に士気高く邁進してもらおう。そのために何をやらなければいけないのか。

それには、3回田に行く、4回田、5回田と行く、そうしたら、行く度にどんな改善がされているかという実感を隊員達に与えることが重要だと思っています。

帰ってくると成果報告で「ああしてへんか、いじやなばら」と書いていってあげなければいけません。そういうった要諦は出来る限りやっちゃってあげよう。金で解決できることばかりはあつてやっちゃってあげよう。

そうしますと、前回よりも良くなっていることに気がつく。そうしたら帰ってくるまでに、まだ「こつこつ」のような改善策がありますよ」と提案してくれる。そしてまたそれをやってみる。それが繰り返されると、我々のことを分かってくれている、忘れられていないと実感できる。中央と現場の心の絆ができるわけです。その実感が大切で、厳しい任務だけれど、5回でも6回でも行きますよというこつこつになる。

こつこつことがありました。1回目に行ったとき、我々は緑の作業服、フライトスーツは緑色、靴は黒だったのです。最初の指揮官が帰ってきました、「防衛部長、大変ですよイライラして」と。「何のこと」と言ったら「いや、砂漠の砂が服に付きますとね、日本人は清潔好きだから常にこつこつやって服の砂を払っている」と言います。黒い靴は、白くなるからすぐに拭こつこつとする。拭いてもまたすぐ白く汚れる。するとイライラするんですね。それで日中の温度は50度を超える、そしたらもう、人間関係もギスギスしてちょっとしたこと喧嘩になっちゃう。もうイライラして作業効率は上がらない。

「そうか、なるほどそれで諸外国の軍隊は砂漠迷彩服を着ているんだ」と気がついた次第です。砂漠の迷彩服、砂漠色した服ですね、あれは、隠れるためじゃなくて、砂漠の砂が気にならないためなのです。それで靴も砂漠色にした、全然ゴミが付こつこつが砂がこつこつが気になりません。「あ、なるほど」と、すぐ服装を変えてもらいました。こちらでいろいろ考えても実際に現場に行ってみなければ分からないことがあるものなのです。3期くらいから間に合ったのですけれども、16期の最後まで、非常に快適な服だと、隊員達には好評でした。

今後やはり、長期間派遣するようになりますと、同じ人間が何回も行くようになる。1回で終わりますと人間というのは瞬発力です。首をすくめていたら、4カ月終わってしまったと。しかしながら、さすがに2回目、3回、4回、5回となりますと、もう瞬発力では切り抜けられません。いろいろな問題点が顕在化してきます。

こつこついった問題点というのは意外に机上では分らないものですから、貴重な教訓として今後に反映していったほうが良いと、後輩達にお話しております。

次に航空作戦の特徴についてです。航空作戦というのは寸秒を争います。今回、私は指揮官だったわけですが、部下に権限を委任しなくてはならない。こつこつこつこつがあまりました。

現地から突然、携帯電話がかかってくるわけです。「今、バグダッド上空です。今、バグ

ダッド空港が攻撃を受けてます」「指揮官、もしすればよろしいでしょうか、という話です。これは実際にあった話です。

航空作戦には、「セントライズド・コントロール・ディ・セントライズド・エクスキュージョン」というテーマがあります。中央で大方針だけ命じておく。その方針に基づき、細部は現場が判断しろ、と。その現場判断の主体は、戦闘機であれば編隊長、輸送機であれば機長ということですよ。

6000マイルも離れた府中に「今、攻撃されてます、どうしますか」と言われても判断する材料がないわけです。しかしながら、一刻の猶予も許されない。そこは現場の判断を尊重せざるを得ない。航空作戦の宿命です。私は大方針として「任務中止の権限は機長に与える、その代り責任は委任できない、責任はおれが取る」いうこと、それから「イラク国内の滞在時間は局限すること。できる限り速やかに離陸し、帰投せよ」そして「汗は流しても、決して血は流さない」その三つを作戦の大方針として指導していました。

その時も「機長に任せろ、責任はおれがとる」と返答しました。結果的に機長はどうしたかということ、バグダッドに着陸しました。その判断を現場を無視した机上論、法律論的だけで解釈しますと「戦闘地域ではないか」「戦闘地域になっているから、帰投すべきではなかったか」と言う人がいるかもしれない。

しかしながら、後で機長から聞いてみたら「いや、あの時は多国籍軍の飛行機が上空で数珠繋ぎになっていました」数珠繋ぎになって多数の航空機がバグダッド上空に待機している「その時に、自分だけ帰りますよといったら、他機と空中衝突の危険性の方が高かった」と。私は「よくやった、ウェルダン」ということで、褒めてやりました。

航空作戦にはそういう特徴があります。これは陸上の指揮官の指揮とは少し違っていると思います。権限もあまり委任しないで責任も取るというのではなくて、現場判断の権限の大部を委任して、結果責任は指揮官がとる。だから現場で指揮官の意図を受けて判断できるよう、普段から厳しく教育し、人材を育てておく、それが航空作戦指揮官の役目なのです。そして結果責任は指揮官が全てとらなければいけない。そういうシチュエーションは結構ありました。これは航空作戦のドクトリンの分野でしょうが、航空作戦のシビアな一面です。

防衛力整備という観点から最後に申し上げますと、何事もなく整備と派遣できたかのようには見られていますが、これは大きな誤解です。多国籍軍の枠組みで、調整しながら、我々

のミッションをやる。当然日本は武器・弾薬は運ばない。それは彼らにしっかりと理解して貰っていますから全然問題はない。

しかしながらイラク国内で多国籍軍として飛ぶときには、多国籍軍の掟というのが分りました。どういふことかと申しますと、これを装備していない飛行機は、イラクは飛ばないでくれ、と。例として、先ほど言いましたように、ミサイル・ウォーニングシステム、これがないと飛ばないでくれ、危ないから迷惑だ、という事なのです。

ではこれは最初から装備されていたかといいますと、そうではなかったのです。大蔵省から財務省に変わってもずっと要求していました。しかしながら「航空自衛隊の輸送機は危ない所を飛ばないでしょう」と言って、認められなかったのです。これがなぜ付いたかといいますと、2001年のアフガン戦争がきっかけです、ナインワンワン（9・11）のあと、テロとの戦いが10月7日に始まったわけです。アルカイダを攻撃するミッションが10月7日に始まったのです。

その直前、戦争が始まるということで、パキスタン国境沿いに避難民が押し寄せてきました。それに対して国連は何とかなければいけないということで、航空自衛隊は6機C-130でテントと毛布を運んだわけです。インドを離陸してパキスタンに向かおうとしたその時に攻撃が始まったわけです。戦場近くの上空を丸腰で飛ばざるを得なかったのです。

「戦場を丸腰で飛ぶんですか」「何とかしてくださいよ」という隊員達の悲鳴を受け、帰国後ようやく3機分査定されたわけです。予算が査定されたといっても装備化には3年かかります。従いまして冒頭述べましたように、防衛局長から「今回は行きますよ、準備してください」といわれたときは、実はまだ装備されておらず、整備会社で整備中だったのです。ぎりぎり之間に合って、最小限の訓練を実施して、送り出した。まさにおっとり刀で駆け付けた、これが実態なんです。

真珠湾のときに、新しい魚雷がぎりぎり之間に合って、ヒトカップ湾から積んだという話を戦史で読みましたが、それと同じようなものです。3機分、持って行く3機がぎりぎり之間に合ったということなのです。

日本の防衛力整備というものは、日本を守るときにの要領、要領というか戦略・戦術・戦技に照らし「これは必要ですか、必要ではないですか」ということで判断していたのですが、こういう防衛力整備のやり方は、今の世の流れに合わないのかもしれないかもしれません。

今後、我々が国際協力をやるときには同様のミッションが出てくるので、そういう

たときには、空軍としての標準、言わば掟を守る必要がでてきます。その掟をスピンス、つまりスペシャル・インストラクションズというのですが。その掟に従った装備を持っていなければ、現場を飛べないのです。平均的な空軍の常識に照らして必要なものを平時から装備しておかねば、いざ国際協力といっても飛べないことがあるということがわかりました。

もう一つの事例があります。実は我々はイラクでは夜は飛べなかったのです。なぜかという、その掟にナイトビジョン・ゴーグルという装備品を装備していることが要求されてきました。赤外線暗視装置と言いついて、夜でも昼間のように見えるという装置があるわけですが、それを我々は持っていないのです。C-130の操縦席がその対応になっていないわけです。ナイトビジョン・ゴーグル自体は空自は保有しているのですが、それを付けますと、C-130は計器板がハレーションを起こして見えない。だからと言って計器板のライトを消したら操縦できない。装備していないのでもちろん訓練もしていない。

イラク上空を飛行する際は、ミサイルの脅威があるので、夜飛ぶときは狙われないように、ナビゲーション・ライトを全部消して飛ぶのです。そのかわりナイトビジョン・ゴーグルで見張りをします。ですから、ひとりナイトビジョン・ゴーグルを持っていない飛行機がいたら、危なくてしょうがない。座頭市が、その辺りをごろちよろしているようなものですから。「気をつけろ。空自の奴らぶつかってくるぜ」となる。だから空自のC-130は夜は飛べなかったわけです。

これによって運用に制約を受けました。日没にかかるような飛行計画は立てられない。バグダッドで飛行機が故障したことがありました。修復しても、飛行が日没に間に合わないから、今日はひとまず救援機を送って、人だけピックアップして帰投し、飛行機をバグダッドに残置する。次の朝、日の出と同時に再びバグダッドに行って修復する。こういったことをしたこともありました。

防衛力整備という理論も、今までのように「日本を守るには・・・北朝鮮のミサイルに対処するには・・・尖閣を守るには・・・」シナリオ・オリエンテッドだけでは国際活動に適合しえないということをも骨身にしみたような次第です。

派遣にあたっては、考えられるものは全て考え、脳に汗をかへくへい考えて、あらゆることをやったつもりです。表に出ないいわゆるアヒルの水かきの部分というのはややもすれば忘れられがちですのべ、そういうことまでやっていたのかということの後輩に伝えて

いかなければならないと思っています。

例えば、実際、棺桶も持って行ったのです「使わなくてよかったな」と。撤収業務隊には捨てて帰れと指示しましたが。棺桶も持って行き、実際に人が死んだときに、どのように出迎えて、どう追悼するのかという段取りも検討しました。

使わなくて本当によかったなと思うのは、棺桶および、進退伺と辞表です。私は隊員達に責任は俺が取ると宣言していましたが、何かあったら責任を取ろうと覚悟はしていました。私は進退伺と辞表を書道の先生に書いてもらいまして、それを常に机の中に入れていました「この二つは使わなくてよかったな」と本当に思っています。

湾岸戦争のときに、「小切手外交」といわれて1兆3000億円使いながら、国際的な侮蔑を受けた。しかしながら、空自は5年間で200億円、たった200億円を使っただけで、これだけアメリカとの連帯感がぐくまれ、そして多国籍軍からは想像以上の評価を受けました。

国際的にも日本が高い名声を得た、ということは、紛れもない事実だと思いますし、隊員たちはほんとはよく頑張ったと誇りに思います。

今後は更に難しい任務がどんどん出てくるでしょう。その時に私が国民の皆さん、あるいは政治家の皆さんに言いたいのは、一言「国民の理解と支持、そして大義名分を与えてやってください。それがないと国際貢献活動は早晚破たんしますよ」ということです。

私の元部下でファイターパイロットだったのが民航の機長でいますけれども「お前、機長で年収いくらもらってる」と聞いたら現役の3倍でした。辞めれば給料が3倍になるということなのです。

それでいて、ほとんどの人間が——人だけ辞めましたけれども——3回、4回5回と厳しい任務につく……、中でも水曜日のミッションというのは、これは特に大変なのです。バグダッドに行ってエルビルに行って、バグダッドに帰り、そしてクエートに戻る。このミッションを夏場にやりますと1日で3キロ痩せるそうです。ペットボトル2リッターのものを6個持っていて、3個は凍らせて行く。7時間の行程をやりますと、バグダッドに2回着陸するのです。「水は飲みほし、心身ともにすの減らして、帰ってきたら、ほんとに3キロ痩せます」と飛行隊長が言っていました。飛行隊長が言うのですから間違いのないと思います。

そついう大変な任務をやりながら、任務を完遂し、1件の事故もなへミッションを遂行

できたのは、ほんとに、隊員たちの崇高な使命感のお陰と感謝しています。我が空自隊員達を非常に誇りに思っています。

時間が参りましたので、言い残した部分は別の機会に譲るとして、最後に一言。皆さま方におかれましては、もし国民の皆さまに、あるいは政治家の方々に自衛隊の国際貢献についてお話しする機会があれば、是非一言「最も大切なことは国民の理解と支持、そして大義名分ですよ」と言っていたらと思います。これを願い申し上げ、講演の締めくくりにさせていただきます。御静聴ありがとうございました。

国防問題講演会 講演録

日時：21.4.15 1500～